

数学 I・A 第 2 問 [3]

(1) 各都市のヒストグラムから、最低気温を読み取ると

東京は $0^{\circ}\text{C} \sim 5^{\circ}\text{C}$

N 市は $-10^{\circ}\text{C} \sim -5^{\circ}\text{C}$

M 市は $5^{\circ}\text{C} \sim 10^{\circ}\text{C}$

よって、都市名と箱ひげ図の組み合わせは

東京—c, N 市—b, M 市—a (ソ ⑤)

(2) ①, ② 散布図から、東京と N 市の最高気温の間には正の相関があり、東京と M 市の最高気温の間には負の相関があることが読み取れる。

③, ④ 散布図から、東京と O 市の散布図の点の方が、東京と N 市の散布図の点より、右上がりの直線に沿って分布する傾向が強いことが読み取れる。

すなわち、東京と O 市の最高気温の間の相関の方が、東京と N 市の最高気温の間の相関より強いことが読み取れる。

よって タ ①, チ ③ (または タ ③, チ ①)

(3) N 市の摂氏での最高気温のデータを $x_{N_1}, x_{N_2}, \dots, x_{N_{365}}$, 華氏での最高気温のデータを $y_{N_1}, y_{N_2}, \dots, y_{N_{365}}$ で表す。

x_N と y_N の間には $y_N = \frac{9}{5}x_N + 32$ …… ① の関係がある。

このとき、 x_N, y_N の分散を X, Y で表すと $Y = \left(\frac{9}{5}\right)^2 X$ …… ②

よって $\frac{Y}{X} = \frac{81}{25}$ (ツ ⑨)

東京 (摂氏) の最高気温のデータを $x_{T_1}, x_{T_2}, \dots, x_{T_{365}}$, 平均値を $\overline{x_T}$, N 市の摂氏での平均値を $\overline{x_N}$, 華氏での平均値を $\overline{y_N}$ と表す。

ここで、① の関係から $\overline{y_N} = \frac{9}{5}\overline{x_N} + 32$ …… ③

共分散の定義から

$$\begin{aligned} W &= \frac{1}{365} \left\{ (x_{T_1} - \overline{x_T})(y_{N_1} - \overline{y_N}) + (x_{T_2} - \overline{x_T})(y_{N_2} - \overline{y_N}) \right. \\ &\quad \left. + \dots + (x_{T_{365}} - \overline{x_T})(y_{N_{365}} - \overline{y_N}) \right\} \\ &= \frac{1}{365} \left\{ (x_{T_1} - \overline{x_T}) \cdot \frac{9}{5}(x_{N_1} - \overline{x_N}) + (x_{T_2} - \overline{x_T}) \cdot \frac{9}{5}(x_{N_2} - \overline{x_N}) \right. \\ &\quad \left. + \dots + (x_{T_{365}} - \overline{x_T}) \cdot \frac{9}{5}(x_{N_{365}} - \overline{x_N}) \right\} \\ &= \frac{9}{5} \cdot \frac{1}{365} \left\{ (x_{T_1} - \overline{x_T})(x_{N_1} - \overline{x_N}) + (x_{T_2} - \overline{x_T})(x_{N_2} - \overline{x_N}) \right. \\ &\quad \left. + \dots + (x_{T_{365}} - \overline{x_T})(x_{N_{365}} - \overline{x_N}) \right\} \\ &= \frac{9}{5} Z \end{aligned}$$

ゆえに $\frac{W}{Z} = \frac{9}{5}$ (テ ⑧)

東京(摂氏)の分散を s_T^2 と表すと、相関係数の定義から

$$V = \frac{W}{\sqrt{s_T^2} \sqrt{Y}} = \frac{\frac{9}{5}Z}{\sqrt{s_T^2} \sqrt{\left(\frac{9}{5}\right)^2 X}} = \frac{Z}{\sqrt{s_T^2} \sqrt{X}} = U$$

よって $\frac{V}{U} = 1$ (ト ⑨)

参考 相関係数は単位の取り方によらないから、 $\frac{V}{U} = 1$ となることは明らかである。

参考 (等式 ②, ③ について)

a, b を定数とする。変数 x のデータから $y = ax + b$ によって新しい変数 y のデータが得られるとき、 x, y のデータの平均値を \bar{x}, \bar{y} , 分散 s_x^2, s_y^2 , 標準偏差を s_x, s_y とすると、次のことが成り立つ。

$$\bar{y} = a\bar{x} + b, \quad s_y^2 = a^2 s_x^2, \quad s_y = |a|s_x$$

証明 変数 x についてのデータを x_1, x_2, \dots, x_n とする。

変数 y のデータの平均値 \bar{y} は

$$\begin{aligned} \bar{y} &= \frac{1}{n}(y_1 + y_2 + \dots + y_n) = \frac{1}{n}\{(ax_1 + b) + (ax_2 + b) + \dots + (ax_n + b)\} \\ &= \frac{1}{n}\{a(x_1 + x_2 + \dots + x_n) + nb\} = a \cdot \frac{1}{n}(x_1 + x_2 + \dots + x_n) + b \end{aligned}$$

よって $\bar{y} = a\bar{x} + b$

また、 $y_k - \bar{y} = ax_k + b - (a\bar{x} + b) = a(x_k - \bar{x})$ であることから、変数 y のデータの分散 s_y^2 は

$$\begin{aligned} s_y^2 &= \frac{1}{n}\{(y_1 - \bar{y})^2 + (y_2 - \bar{y})^2 + \dots + (y_n - \bar{y})^2\} \\ &= \frac{1}{n}\{a^2(x_1 - \bar{x})^2 + a^2(x_2 - \bar{x})^2 + \dots + a^2(x_n - \bar{x})^2\} \\ &= a^2 \cdot \frac{1}{n}\{(x_1 - \bar{x})^2 + (x_2 - \bar{x})^2 + \dots + (x_n - \bar{x})^2\} \end{aligned}$$

よって $s_y^2 = a^2 s_x^2$

これより、変数 y のデータの標準偏差は $s_y = |a|s_x$ (終)